

日本語の「夕」とスペイン語におけるその対応形式 について : 日本語の名詞述語文における「夕」とス 페인語におけるその対応形式を中心として

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5536>

出版情報 : 言語文化論究. 18, pp.129-153, 2003-06-25. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

日本語の「タ」とスペイン語におけるその対応形式について

— 日本語の名詞述語文における「タ」とスペイン語におけるその対応形式を中心として —

山 村 ひろみ

0. はじめに

言語は、通常、事態と発話時あるいは発話時以外の時点との時間的関係を表すために何らかの手段を持っている。しかし、この時間性の表出に用いられる手段のあり方は各言語によって異なっており、それは本稿が対象とする日本語とスペイン語の間にも観察される。日本語もスペイン語もある事態を発話時より以前に起こったこととして表出するための特別の言語形式を有している点では共通するが、その形式が他の時間性を表出する諸形式に対して持つ関係性に注目すると、両言語の間には看過できない相違のあるのが分かるからである。

本稿は、このように一見類似してはいるがその実態は大いに異なると思われる日本語とスペイン語の時間性表出に関わる形式の中から、特に日本語の名詞述語文に出現する「タ」とそれに対応するスペイン語の諸形式を取り上げ、それらの類似点と相違点の観察および考察を行う。そして、その結果が、日本語話者がスペイン語を学習する際、あるいは逆に、スペイン語話者が日本語を学習する際の一助となることを目指すものである。

以下、本稿の構成を示すと次のようになる。第1節では、本稿が比較対照する日本語とスペイン語の時間性表出に関わる形式の概説を行なう。続く第2節では、遠藤周作の『沈黙』とそのスペイン語訳を資料にしながら、日本語の名詞述語文の過去形とそれに対応するスペイン語の形式の観察を行なう。また、第3節では第2節で行なった観察を基に、日本語の名詞述語文の過去形とそれに対応するスペイン語諸形式の比較検討を行なう。そして最後の第4節では、以上の総括を行う。

1. 日本語とスペイン語の時間性表出に関わる形式

本節では、次節で行う日本語とスペイン語の比較対照の前段階として、両言語における時間性表出に関わる形式の概観をする。

1.1. 日本語の時間性表出に関わる形式のあり方

まず、日本語の時間性表出に関わる形式のあり方について見てみよう。

金水(2001)は、日本語の表出する時間性のうち、発話時から見た事態の前後関係のことを時制性と呼んでいる。この時制性は日本語では「ル」と「タ」の形式的対立として表出され、前者は非過去、後者は過去を示すとされている(以下、この「ル」「タ」に見ら

れる時制性の形式的対立のことを金水にならいテンスと呼ぶ¹。一方、日本語には、一般に動詞で表される動的な出来事の、始まり・過程・終わりなどの段階を丸ごと捉えるのか、あるいはある段階のみを取り出して述べるのかという区別もあり、これを金水はアスペクト性と呼んでいる。このアスペクト性の違いの最も代表的な対立は「ル」と「テイル」、「タ」と「テイタ」の間に見られる（以下、この「ル」「テイル」、「タ」「テイタ」に見られるアスペクト性の形式的対立のことを同じく金水にならいアスペクトと呼ぶ²。この対立の機能的差異をめぐっては様々な解釈があるが、本稿では取り合えず「ル」「タ」は完成相を、そして「テイル」「テイタ」は継続相を示すとして論を進めていく³。以上のことを踏まえた日本語の基本的テンス・アスペクト体系は次のようになる⁴。

表1. 日本語の基本的テンス・アスペクト体系

	完 成 相	継 続 相
非過去	ル	テ イ ル
過去	タ	テ イ タ

さて、金水は「日本語における時間性の表現は、動的な出来事と、そうでない事柄とでまったく異なってくる」と述べている。つまり、動的な出来事の解釈のためには、アスペクト性の区別が必要となってくるが、動的ではない非出来事の解釈にはその必要がないというのである。

周知のように、日本語では動的な出来事は動詞で表出されるが、だからといってすべての動詞が動的な出来事を示すわけではなく、「ある」「いる」「要る」などに代表される一連の動詞は動詞ではあっても出来事は示さない。金水はこれらの出来事を示さない動詞を静態動詞、逆に、出来事を示す動詞を運動動詞と呼び両者を明確に区別している。また、形容詞、形容動詞および名詞と「断定の助動詞」からなる名詞述語文も前述の静態動詞と同じく静的な特徴・性質を表出するため、金水はこれらと静態動詞をまとめて静的述語と呼んでいる。

このような事態間に見られる時間性の違いは、上で見たテンスとアスペクトの表出に深く関係する。金水のあげた以下の例を参照されたい⁵。

¹ 日本語のテンスの形態的区分の記述法は研究者によって異なっており、過去と非過去を表出する形式として「スル」「シタ」をあげる者もある。例えば、後述する工藤（1995）はその代表である。しかし、本稿は、依拠する金水（2001）が「ル」「タ」をテンスとしていることから、それにならい「ル」「タ」を時間性表出の形式とした。

² テンスの場合と同様にアスペクトの形態的区分も研究者によって異なっている。本稿の「ル」「テイル」、「タ」「テイタ」は金水（2001）の p. 7にある表 1. 1 の記述にならったものである。ただし、この表中の記述を厳密に採用するならば、アスペクトは「Ø」「テイ」の対立になる。すなわち、純粋にアスペクト性の対立だけに関与する形態素は「Ø」と「テイ」の部分ということである。

³ 「ル」「タ」を完成相、「テイル」「テイタ」を継続相とするのは工藤（1995）である。本稿が依拠した金水（2001）は、特に運動動詞に見られる「ル」と「タ」を取り上げ、それを単に完成相と解釈する際の問題点を指摘しながらも、その是非自体については保留という態度を取っている。cf. 金水（2001）, p. 57.

⁴ この表は金水（2001）, p. 9 に掲載されたものに基づく。ただし、表題は執筆筆者。なお、この表自体は工藤（1995）が日本語の基本的テンス・アスペクト体系と呼ぶものである。

⁵ 同書, p. 6 の(4)からの引用。

- (1) 小池さんはラーメンを {食べた/食べていた/食べる/食べている}。〈動的な出来事〉
 (2) 田中さんは {病気だ/病気だった}。〈一時的な状態〉
 (3) 鯨は哺乳類だ。〈超時間的・恒常的判断・恒常的状态〉 (cf. 鯨は哺乳類だった)

(1)が示すように、「食べる」のようないわゆる運動動詞では「ル」と「タ」のテンスの対立と「ル」「テイル」, 「タ」「テイタ」のアスペクトの対立の両方の表出が可能である。一方, (2)のような静的述語の場合, 「ル」「タ」の間のテンス対立はあっても, アスペクトの対立はない。さらに, 金水によれば, 静的述語のなかでも(3)のような超時間的・恒常的状态を示すものはアスペクトを持たないばかりでなく, テンスの対立もなくなってしまふという⁶。以上のことをまとめると, 次の表になる⁷。

表2. 時間性とテンス・アスペクト体系の関係

意味	動的な出来事	一時的状態	超時間的・恒常的
品詞	運動動詞	静的述語	
アスペクト	○	×	×
テンス	○	○	×

これまで述べてきたことに明らかなように, 日本語の研究者の間では, いわゆる静的述語は動的な出来事を含まないゆえにアスペクト性を持たず, その結果, アスペクトの形式的対立もないというのが自明のこととして扱われている。実際, 次節で詳しく見ることになる日本語の名詞述語文, すなわち名詞+「断定の助動詞」からなる文は「ル」「タ」しか許容しない。しかし, 次項で述べるように, 日本語の静的述語に対応するスペイン語の動詞形式のあり方を見ると, 従来主張されてきた静的述語における動的出来事性の欠如という見解には再考の余地があるように思われる。

1.2. スペイン語の時間性表出に関わる形式のあり方

次に, スペイン語における時間性表出に関わる形式のあり方を見てみよう。

スペイン語では, 当該事態の時間性はまず動詞の活用形式によって表出される。最新のスペイン語記述文法書である *Gramática descriptiva de la lengua española* の該当箇所の記述によれば, 現代スペイン語の時間性を表出する時制は次のように規定されている⁸。

⁶ cf. の「鯨は哺乳類だった」という文が示すように, 超時間的・恒常的状态を表す事態が「タ」によって表出されることは不可能ではない。金水によれば, この現象は「事柄自体ではなく, 話し手が情報をどのように受け入れ, 管理しているかという面から, 時間性に関わるのであろう」と述べているが, 本稿はこの問題は扱わない。cf. 同書, p. 6.

⁷ 同書, p. 6 の(5)の表の引用。ただし, 表題は執筆者による。

⁸ 以下にあげる時制形式は, *Gramática descriptiva de la lengua española* の中の, Rojo & Veiga の執筆による第44章 “El tiempo verbal. Los tiempos simples” と Cartagena の執筆による第45章 “Los tiempos compuestos” の中で扱われたものである。スペイン語の動詞は主語の人称と数に応じて各時制で6つの形式を持つが, 以下では, いちばん左に「歌う」を意味する動詞 *cantar* の各時制の1人称単数形の形式を示し, その次にその時制のスペイン語の一般的名称を, また, その右にはスペイン語の名称の一般的日本語訳を記している。なお, 各時制のスペイン語および日本語の名称については, 研究者によって異同がある。本稿では, スペイン語の名称は RAE (1973) に, また日本語の名称は山田他 (1995) に従った。

(I a) 直説法

canto: presente 現在形

canté: pretérito perfecto simple 点過去形

cantaba: pretérito imperfecto 線過去形

cantaré: futuro 未来形

cantaría: condicional 過去未来形

(I b) 接続法

cante: presente 現在形

cantara/cantase: pretérito imperfecto 過去形

(II a) 直説法

he cantado: pretérito perfecto compuesto 現在完了形

había cantado: pretérito pluscuamperfecto 過去完了形

hube cantado: pretérito anterior 直前過去形

habré cantado: futuro perfecto 未来完了形

habría cantado: condicional perfecto 過去未来完了形

(II b) 接続法

haya cantado: pretérito perfecto 現在完了形

hubiera cantado/hubiese cantado: pretérito pluscuamperfecto 過去完了形

スペイン語動詞の時制形式は主語の人称・数、ならびに、直説法、接続法という法の対立と不可分である。また、一見して明らかのように、それは日本語の時制形式とは比較にならないほど多様で複雑である。上では、まず単純形と助動詞 *haber* と過去分詞からなる複合形の2種類に分けたが、そのそれぞれがさらに現在、過去、未来、過去未来に分かれているのが分かるであろう。しかし、このように多種多様なスペイン語の時制形式は、日本語のそのように動詞の意味や品詞の種類によって制約を受けることはない。つまり、問題を動詞そのものの形式に限るかぎり、運動動詞であれ静態動詞であれ上記のどの時制形式によっても表出可能なのである⁹。

次に、スペイン語におけるアスペクト性について見てみよう。

従来の規範文法によれば、スペイン語の動詞には *perfectivo/imperfectivo*「完了／未完了」の対立があるとされ、上述の時制形式のうち、すべての複合形と直説法の点過去形は *perfectivo*、残りの単純形はすべて *imperfectivo* と解釈されると主張されてきた。このスペイン語のアスペクト性の対立がどのような弁別特徴 (= 素性) に基づくものなのかに関しては、研究者によっていろいろな考え方があがるが、最近では時間的限定性 (*delimitación temporal*) の有無に拠るとする見方が一般的である¹⁰。この解釈によれば、時間的限定性に関して有標の *perfectivo* な時制形式は当該事態の開始から終結を表出するが、一方、時間的

⁹ しかし、問題が主語と動詞さらにその動詞の項 (*argumentos*) からなる命題の当該時制形式による表出の可否になると、事情は異なってくる。山村 (1998) が指摘したように、命題の中には、例えば、*imperfecto* による表出は可能でも *pretérito perfecto simple* による表出は大変困難なものが存在するからである。

¹⁰ Cf. García Fernández (1998), García Fernández (1999).

限定性に関して無標の imperfectivo な時制形式は当該事態の開始や終結については言及しない。

ところで、スペイン語のAspectoに関して注目すべきは、過去に言及する単純形式における perfectivo と imperfectivo の対立、すなわち上の網掛け部分、pretérito perfecto simple「点過去形」(以下、ps.と記す)と pretérito imperfecto「線過去形」(以下、imp.と記す)の対立である。前述の時間的限定性の有無に基づくAspecto解釈によれば、ps.は perfectivo であることから、当該事態が発話時に前に生起し終結したことを示し、他方、imp.は imperfectivo であることから当該事態の時間的限定性には何ら言及しないということになる。この解釈の妥当性はこれまで、以下に見られるような ps.と imp.の文法性の違いに明らかだとされてきた。

- (4) Juan amó (ps.)/*amaba (imp.) a Salomé durante varios años. (García Fernández 1999 : 3145)
フアンは数年間サロメを愛した。

(4)では、時間的限定性に関して有標の ps.による表出は可能でも、それに関して無標の imp.による表出は非文となる。上述の、ps.と imp.の機能的差異は時間的限定性の有無にある、とする説によれば、この文法性の違いはもっぱら同文が当該事態の時間的限定性を示す副詞句 durante varios años (数年間)と共起していることに起因する。つまり、時間的限定性を明示する副詞句があることから、時間的限定性の表示に関与しない imp.は排除されてしまうというわけである。しかしながら、このようなAspectoの解釈は ps.と imp.の実態のすべてをうまく説明できるわけではない。次例を参照されたい。

- (5) Durante esos cuatro años vivió (ps.)/ vivía (imp.) en un pequeño apartamento.
(Yamamura 1999 : 14) その4年間彼は小さなアパートに住んでいた。

(5)は durante esos cuatro años (その4年間)という時間的限定性を明示する副詞句と共起しているにも拘らず、ps.のみならず imp.による表出も可能となっている。これは ps.と imp.の機能的差異をAspecto性の違いによって解釈しようとする説に対する明らかな反例である。

さて、研究者の中には、このような反例の存在、また、imp.と presente との間に見られる機能的類似性に基づきながら、ps.と imp.の機能的差異はAspecto性の違いにあるのではなく時間性の違いにある、と主張する者たちがいる¹¹。この解釈によれば、言語の時間性とは、ある基準時とそれに対する時間関係、すなわち、前時性・同時性・後時性によって示されるものであり、それに従うならば、ps.は「発話時」を基準時としながらそれに対して「前時関係」にある事態を示すのに対し、一方、imp.は「既定の過去時」を基準時としながらそれに対して「同時関係」にある事態を示す。つまり、同説によれば、ps.と imp.

¹¹ ps.と imp.の機能的差異をAspecto性の違いとする説に対する反例に関しては、山村(1997)、山村(1999)に詳しい。また、両形式のAspecto的解釈に対する反論については、上述の論文の他に、Rojo(1974)、Rojo(1990)、Rojo & Veiga(1999)、山村(1996)、Yamamura(2000)、Yamamura(2001)および Brucart(印刷中)を参照されたい。

は基準時と時間関係の両方において異なっているので両者は時間的にまったく異なると結論づけられることになるのである。

以上、スペイン語動詞の過去に言及する二つの単純形式、ps.とimp.の解釈にはアスペクト性の違いとするものと時間性の違いとするものがあることを見たが、本稿の主旨は日本語の「タ」に対応するスペイン語の形式を抽出し考察することにあるので、ps.とimp.の機能的差異をめぐるこれら二つの解釈の是非についてはこれ以上触れないことにする。ただし、日本語の「タ」との比較対照の中でこれら二形式に対する新たな知見が得られた場合は、その限りではない。本稿において新たに得られた情報はps.とimp.の機能分析のために積極的に役立てていくつもりである。

1.3. 日本語の名詞述語文の過去形とスペイン語の ser コピュラ文の過去形

1.1., 1.2. では日本語とスペイン語の時間性表出に関わる形式を概略したが、ここでは本稿が具体的に観察、比較対照する両言語の対象について簡単に説明しておきたい。

次節で実施される観察は、日本語の名詞述語文の過去形とそれに対応するスペイン語の形式のあり方・振る舞いである。先に見たように、名詞+「断定の助動詞」からなる日本語の名詞述語文は静的述語に分類されるので、その過去形としては「タ」しか取ることができない。

(6) ホセは学生だった/*テイタ。

(6)のような日本語の名詞述語文に対応するスペイン語の表現としてまず思い浮かぶのは、主語とそれに対する補語を繋ぐいわゆる ser コピュラ文である¹²。次例を参照されたい。

(7) José fue (ps.) /era (imp.) estudiante. ホセは学生だった。

¹² よく知られているように、スペイン語にはいわゆるコピュラ動詞として ser と estar の 2 種類がある。これら二動詞の違いについてはこれまでも様々に議論されてきたが、ここではその点には触れず、各動詞が補語とすることのできる品詞の違いについてのみ言及しておく。すなわち、ser はその補語として名詞句、形容詞句、副詞句を取ることができるが、estar はその補語として形容詞句、副詞句しか取ることができない。以下、ser, estar の現在形各例を示す。下線は ser, 点線は estar を指す。

i) ser+名詞句: Yo soy estudiante. 私は学生です。

María es una chica muy simpática. マリアはとても感じがよい女の子です。

ser+形容詞句: José es muy alto. ホセはとても背が高い。

Mi habitación es grande. 私の部屋は大きい。

ser+副詞句: La clase de español es a las nueve. スペイン語の授業は9時です。

La clase de español es en esta aula. スペイン語の授業はこの教室です。

ii) estar+形容詞句: José está muy cansado. ホセはとても疲れています。

Mi habitación está desordenada. 私の部屋は散らかっています。

estar+副詞句: Carmen está en la biblioteca. カルメンは図書館にいます。

La clase está al fondo del pasillo. その教室は廊下のつきあたりです。

本稿は日本語の名詞述語文との比較対照を目指すものであるので、以下、もっぱら問題にされるのは、名詞句を従えることのできる ser 文ということになる。

(7)は(6)の日本語文を単純にスペイン語に訳したものである。1.2.で見たように、スペイン語には過去に言及する形式が豊富にあるが、(6)のように何の文脈もなく提示された「タ」によって表出された日本語の名詞述語文は、(7)が示すように、ps.のser コピュラ文によって表出されることも、また、imp.のser コピュラ文によって表出されることも可能である。

上記の(6)と(7)は、日本語とスペイン語の時間性表出の比較対照をする際には、対応するもの同士の間には何らかの非対称性がある場合の方がそうでない場合よりも実り多いことを示唆しているように思われる。というのも、(7)の二つのスペイン語文は、これまで日本語研究者の間で自明と考えられてきた静的述語文の時間性の欠如という理解のあり方に一石を投じるものとなるかもしれない、また一方、スペイン語にとっても、対応する日本語の名詞述語文を詳細に観察することは、ps.あるいはimp.によって表出されたser文の解釈上の違いをいっそう明確に理解することにつながるかもしれないからである。

本稿は以上の観点から、日本語とスペイン語の時間性表出の比較対照をするにあたり、まず、日本語の名詞述語文の「タ」形による表出とそのスペイン語における対応形式を調査することにした。

2. 観察

2.1. 資料体と観察方法

日本語の名詞述語文の「タ」による表出とそのスペイン語における対応形式を調べるにあたり資料として用いたのは、遠藤周作の『沈黙』とそのスペイン語訳である¹³。これらの資料体から「タ」によって表出された日本語の名詞述語文とそれに対応するスペイン語を抽出したが¹⁴、その際、抽出する日本語の名詞述語文は地の文に出現した文末終止形のものに限った。抽出対象を地の文に出現したものに限ったのは、取り合えず、「語り」における当該文の振る舞いに注目したかったからであり、また、対象を文末終止形に限ったのは、それ以外の活用形ではその時間性の解釈が複雑になることが予想されたからである。なお、名詞述語文の「タ」による表出の一般的形式は「名詞+だっタ」だが、本稿では「名詞+でしタ」、また「名詞+であっタ」もデータとして採取した。

2.2. 観察結果

2.2.1. 「タ」によって表出された名詞述語文に対応するスペイン語の時制形式

表3は地の文に出現した「タ」で表出された名詞述語文がどのようなスペイン語の時制形式と対応しているかを示したものである。

¹³ 資料の詳細は次のとおり。遠藤周作『沈黙』1997[※]、新潮文庫、新潮社。スペイン語版 *Silencio*, traducido por Jaime Fernández y José Vara, 1988, Barcelona : Edhasa.

¹⁴ 採取した「名詞+断定の助動詞」からなる名詞述語のデータにはいわゆる形容動詞も含まれている。意味的観点からすれば形容動詞は形容詞に含むべきであるが、本稿はあくまで形式的対応の調査を第一としているので、このような判断をした。

表3. 「タ」に対応するスペイン語の時制形式

	imp.	ps.	pr.	cond.	plusc.	pc.
名詞+だった	83/108	11/108	8/108	3/108	2/108	1/108

上記の表によれば、全部で108例あった「タ」で表出された日本語の名詞述語文は、imp., ps., pluscuamperfecto (以下, plus.), condicional (以下, cond.) というスペイン語の過去系列の時制形式のみならず, presente (以下, pr.) によっても表出されているのが分かる。以下では, これらの形式で表出された当該スペイン語文を頻度の高い imp. から順に見ていく。なお, a. は日本語文, b. はスペイン語文である。また, 該当する「名詞+だった」の部分は「だった」, それに対応するスペイン語部分は下線で示す。

- (8) a. 彼等は日本人の信徒だった。 p. 33
 b. Todos ellos eran cristianos. p. 28
- (9) a. 少しの米と胡瓜をかじっただけの身にはキチジローがちらつかすこの食糧はたまらない誘惑だった。 p. 93
 b. Para un cuerpo como el mío que, desde la mañana, no había probado más que un poco de arroz seco y un pepino, el banquete que Kichijiro desplegaba ante mis ojos era una tentación irresistible. p. 76

日本語の「名詞+だった」に対応するスペイン語形式で最も出現頻度の高いのは, (8b) (9b) のように, imp. によって表出された ser コピュラ動詞が名詞句あるいは形容詞句をその補語として従えたものだった¹⁵。それらは, 上記の例が示しているように, 小説が展開する場面における主題(主語)の属性・状況を表していることが多い。他方, imp. によって表出された「名詞+だった」の中には, 次のように, ser 以外の動詞に置換されていた例もある。

- (10) a. それを思いつかなかったのはやはり心の余裕がなかった証拠だった。 p. 111
 b. Pero no se le había ocurrido y eso probaba lo desquiciado que andaba ya. p. 89

後述するように, (10b) のように, スペイン語のコピュラ動詞以外の動詞句に置き換えられた場合の名詞述語文は, 人や物の出来事・活動・評価に言及していたり, いわゆる形式名詞文のことが多い。

次に, 「名詞+だった」がスペイン語の ps. によって表出された例を見てみよう。

- (11) a. 彼らにとってはこれは休息となりますが, 私やガルベには慣れるまで甚だこの習慣は苦痛でシタ。 p. 60
 b. Para estos japoneses es la postura de descanso ; pero hasta que nosotros nos hicimos a

¹⁵ imp. によって表出された「名詞+だった」の対応形83例のうち61例がこのタイプであった。

ello, fue muy doloroso. p. 50

- (12) a. 一軒の空家に入って食べものを探しました。が、口に入れたのは結局、鉢の中に溜めた水だけでシタ。 p. 81
 b. Penetré en una casa desierta en busca de comida, pero todo lo que pude encontrar fue un poco de agua en un barreño. p. 66
- (13) a. これがキチジロに話しかけた私の最初の言葉でシタ。 p. 92
 b. Éstas fueron mis primeras palabras a Kichijiro, y ... p. 75
- (14) a. 一日中、しずかな日だったが、昼前から温度は次第にあがり、強い陽が格子から容赦なく流れこんできた。 p. 164
 b. Fue un día tranquilo. Desde el mediodía la temperatura fue aumentando y se colaba por la rejilla un sol implacable. p. 132
- (15) a. 両側に並んでいる顔の中から司祭はひそかに切支丹らしい者の表情をさがしたが無駄だった。 p. 201
 b. El padre trató de encontrar en aquella doble hilera de caras el gesto revelador de un cristiano oculto, pero fue inútil. p. 160
- (16) a. 今は二人のみ生存しているが、一人は忠庵というポルトガル人で元当地の耶蘇会の長であつたが、... p. 230
 b. Actualmente sólo hay dos vivos dos apóstatas: uno es el portugués Chuan, que fue provincial de los jesuitas del Japón, p. 186

ps.によって表出された「名詞+だった」11例のうち、ser コピュラ動詞に置き換えられていたのは(11)から(16)の6例だった。これは先に見た imp.によって表出された「名詞+だった」の対応形の大部分が ser コピュラ動詞によって置き換えられていたのとは大きく違う点である。また、このことは以下の例に見られるように、ps.によって表出された日本語の名詞述語文は ser コピュラ文以外の動的動詞句によって置き換えられる傾向にあることを意味するものでもある。

- (17) a. 昨日も雨でシタ。 p. 37
 b. Ayer también llovió. p. 32
- (18) a. 通り雨は、終わりかたも急激でシタ。 p. 87
 b. El chaparrón cesó tan de repente como había venido. p. 71
- (19) a. しかし司祭は自分の心が一瞬だが洗われた感じだった。 p. 137
 b. Pero por un instante sintió el padre como si le hubieran lavado el corazón. p. 109

- (20) a. 何のために穴を掘るのかと番人に訊ねると、厠をつくるという返事だった。p. 144
 b. Preguntó a los guardias para qué cavaban aquellas fosas y le dijeron que para hacer letrinas. p. 115

imp.によって表出された場合と同様に、ser コピュラ動詞以外の動詞句の ps.に置き換えられた日本語の名詞述語文は、「名詞＋断定の助動詞」の形はしているものの、その意味自体は静的な属性というよりはむしろ動的な出来事を示していると解釈される。ps.によって表出された名詞述語文において ser コピュラ文以外の動詞句が頻出するのには、このような名詞の語彙的特性が深く関係していると思われる。

さて、表3が示すように、日本語の「名詞＋だった」はスペイン語の pr.によって表出されることもあった。その中には(21b)のように、「名詞＋だった」の表出する事態が過去から語り手の現在まで継続してきたことから、pr.によって表出されたと解されるものがある。

- (21) a. 日本に来てから彼はいつも陽気でシタ。p. 43
 b. Desde que llegamos al Japón, Garpe está siempre de buen humor. p. 36

また、スペイン語の pr.によって表出された「名詞＋だった」文の中には、次例のように、当該文がいわゆる語り手にとっての「真理」を示しているために pr.によって表出されたと理解されるものもあった。

- (22) a. いいや、主は檻褌のようにうす汚い人間しか探し求められなかった。床に横になりながら司祭はそう思った。聖書のなかに出てくる人間たちのうち基督が探し歩いたのはカファルナウムの長血を患った女や、人々に石を投げられた娼婦のように魅力もなく、美しくない存在だった。魅力のあるもの、美しいものに心ひかれるなら、それは誰だってできることだった。そんなものは愛ではなかつた。色あせて、檻褌のようになった人間と人生を棄てぬことが愛だった。司祭はそれを理屈では知っていたが、しかしまだキチジローを許すことはできなかった。p. 149
 b. No, no era así. La verdad es que Cristo solo había ido en pos de los que están mugrientos como harapos. Tendido en el camastro, el padre lo veía claro. Entre las personas que aparecen en la Escritura, Cristo fue detrás de la mujer de Cafarnaún que padecía flujo de sangre, de seres cuyas vidas no tenían encanto ni belleza, como las ramerías que la gente apedreaba por la calle. Dejarse ganar el corazón por el encanto, por la belleza, eso lo puede hacer cualquiera. Eso no tiene nada de amor. Amor no es rechazar una vida humana, un ser humano ajado, convertido en harapo. El padre lo tenía muy claro en su cabeza, pero todavía imposible perdonar a Kichijiro. p. 119

(22a) は語り手が主人公である司祭の心のうちを描写したものであるが、そのすべてが

「タ」によって表出されている。一方、それに対応するスペイン語文では *imp.*, *ps.* と *pr.* の3種類の時制形式が使い分けられている。このうち今問題とする「名詞+だッタ」の部分が *pr.* で表出されているのは、当該内容が、この小説が展開している「語り」の世界以外、すなわち *pr.* の使用が最も一般的な発話世界でも有効と判断されたものである¹⁶。このようにスペイン語の「語り」における *pr.* の出現には、同形式によって表出される事態内容の発話時 (= 語りの世界以外) に対する関与性 (*relevancia*) が大いに関係するが、日本語の「語り」における「ル」と「タ」の使い分けにはこれとは異なる原理が働いているように見える。というのも、日本語の地の文における「ル」と「タ」の交替はスペイン語とは比較にならないほど頻繁に起こり、例えば、ここで扱ったスペイン語の *pr.* によって表出された「名詞+だッタ」文も簡単に「名詞+だ」という現在形に置き換えることができるからである。

最後に、出現頻度の少なかった *cond.*, *plusc.* ならびに *pc.* によって表出された例をしてみる。

- (23) a. その最初の手引きをしてくれるよう、この男を利用することが必要でシタ。p. 21
 b. Para este primer paso, tendríamos que servirnos de este hombre. p. 20
- (24) a. 私は人々に奉仕するために生まれてきた司祭でした。その奉仕を肉体の臆病ゆえに怠るのは恥でシタ。p. 48
 b. Yo era sacerdote, nacido para servir a los hombres, y sería una vergüenza ser infiel a ese servicio sólo porque la carne es flaca... p. 40
- (25) a. もし神がいなければ、幾つもの海を横切り、この小さな不毛の島に一粒の種を持ち運んできた自分の半生は滑稽だッタ。p. 177
 b. Si no existiera, la mitad de su vida sería algo grotesco; media vida cruzando mares y mares para traer a esta pequeña isla estéril un grano de semilla... p. 142

(23) (24) (25) は「名詞+だッタ」がスペイン語の *cond.* に対応した例である。このうち (23) では当該名詞述語文が *tener que* + 不定詞「～しなければならない」という義務・必然を示す迂言形式に置き換えられ、一方、(24) (25) では当該名詞述語文が *ser* 動詞を用いたコピュラ文に置き換えられている。スペイン語の *cond.* にはある過去時に対して後時的関係にある事態を示すという時制機能のほかに、過去における推量を示すというモーダルな機能もあるが、上記三例の *cond.* はどれもその文脈から、展開する小説場面における推量を示していると解釈される。なかでも *si* 条件文の帰結節に出現した (25b) の *cond.* はこの推量

¹⁶ スペイン語の *pr.* には時間の枠に入らない超時間的事態、いわゆる「真理」に言及する機能があるが、通常、過去系列の時制形式で表出されるスペイン語の「語り」の文に散見される *pr.* はまさにそのような「真理」的事態を表していると考えられる。その意味において、「語り」の文において出現した *pr.* は、従属文に出現した時制の一致をうけない *pr.* と同様のものと解釈することができよう。cf. 山田他 (1995), p. 306.

という意味が最もはっきりと読み取れる例である。他方、日本語の「名詞+だっタ」がこのようなスペイン語の推量を示す形式に対応しているという事実は、従来過去に生じた出来事や過去において存在した状態を示すとされてきた「タ」に過去の推量を示す可能性もあることを示唆するものと思われる¹⁷。

次に、「名詞+だっタ」がスペイン語の *plusc.* に対応した例を見る。今回の調査で当該名詞述語文が *plusc.* に置き換えられていたのは以下の2例だった。

- (26) a. トモギ村の百姓たちの合図ではありませんでした。トモギ村の信徒なら戸を軽く三つ叩くというのが約束でシタ。 p. 47
 b. No era la contraseña de los labradores de Tomogi. Habían convenido en dar tres golpes suaves en la puerta. p. 40
- (27) a. 耳元に何か褐色の塊が飛んできた。だれかが投げつけた馬糞だっタ。 p. 200
 b. Algo le dio en la oreja, un trozo de algo, color azul negruzco. Le habían tirado un cagajón de caballo. p. 160

スペイン語の *plusc.* はある過去の時点よりもさらに前に生じた事態を示すと言われているが、(26)(27)に出現した *plusc.* はどちらもこの *plusc.* の機能を明示している。(26b)の内容 (Habían convenido en dar tres golpes suaves en la puerta. 彼らは戸を軽く3回叩くという取り決めをした。)は前文の示す内容よりも以前に起こったことであり、また、(27b)の内容 (Le habían tirado un cagajón de caballo. 彼に馬糞が投げつけられた。)も同様に、前文の内容よりも前に起こった事態を示しているからである。このようにスペイン語では、*plusc.* という時制形式による表出自体がそれによって表出される事態のある過去に対する前時性を示すことができるが、日本語の「タ」にそのような機能はない。それゆえ(26a)(27a)の「名詞+だっタ」が示しているのは、展開する小説場面と同時的關係を持つ状況であったり、その場面において新たに確認・発見された事態となっている。したがって、(26a)と(26b)また(27a)と(27b)は、表出する小説の場面そのものは同じでも、その場면을構成する各事態の時間關係の把握の仕方は異なっているということになる¹⁸。

最後に「名詞+だっタ」がスペイン語の *pc.* に対応した例を見てみよう。

- (28) a. 殉教でシタ。しかし何という殉教でしょう。 p. 75
 b. Ha sido todo un martirio. Pero, ¡ qué martirio, Dios mío ! p. 61

¹⁷ 本来過去に生じた事態や状態に言及するとされる「タ」が反実仮想文の帰結節に出現し推量を示すことがあるということに関しては、金水(2001)も触れている。cf. 金水(2001), pp.90-92.

¹⁸ 例えば、(27)の前文「耳元に何か褐色の塊が飛んできた」をA、その後の文「だれかが投げつけた馬糞だっタ」をBとするならば、日本語文ではAがBに先行する事態と位置づけられるのに対し、対応するスペイン語文では「だれかが馬糞を投げつけた」という表出の形を取ることで、BがAに先行する事態として提示されているということである。このように日本語とスペイン語ではAとBの前後關係の提示の仕方に違いが見られるが、各言語が喚起する小説の場面、すなわち、主人公の耳元に馬糞が投げつけられたという場面はどちらも同じと言える。

(28)は主人公である司祭が日本のキリスト教徒らが自分の目の前の海中で磔刑に処されるのを目撃した直後の記述である。この文の直前にはその磔刑の場面が pr. で生々しく描かれており、(28)はその pr. で表出された内容に関するコメントとなっている。つまり、(28)が ps. や imp. のような過去系列の時制形式ではなく pc. で表出されたのは、それが pr. で表出された事態に対する評価を表しているからに他ならない。このような「語り」の部分における pr. および pc. の用法はいわゆる「歴史的現在」と呼ばれているが、この「歴史的現在」が効果を発揮するには、それ以外の部分が一環して過去系列の時制形式で表出されている必要がある。一方、対応する日本語の「名詞+だっタ」にこのスペイン語の「歴史的現在」に見られたのと同じ劇的效果は認められない。確かに、日本語版においても磔刑の場面は「ル」で表出されておりその生々しさを感じることができないわけではないが、その度合いはスペイン語版ほどではない。このことから、日本語の「語り」では「ル」と「タ」の交替が「歴史的現在」という特別な文体的効果とは違った形で頻繁に起こっているのではないかと考えられる。

以上が、日本語の「名詞+だっタ」に対応するスペイン語の各時制形式のあり方である。

ところで、「名詞+だっタ」に対応するスペイン語の時制形式を観察する途中で、日本語の名詞述語文は必ずしもスペイン語の ser コピュラ文に対応しないことが分かったが、当該名詞述語文の意味内容とそれに対応するスペイン語の文タイプあるいは時制形式には何らかの関係があるように思われる。そこで次項では、「名詞+だっタ」によって示された日本語の名詞述語文がスペイン語のどのような述語タイプの文に対応するかに焦点をあて観察してみることにする。

2. 2. 2. 「タ」によって表出された名詞述語文に対応するスペイン語の文タイプ

前項でも指摘されたように、日本語の「名詞+だっタ」は必ずしもスペイン語の ser コピュラ文によって置き換えられるわけではない。それは ser コピュラ文以外の一般的な動詞文によって置き換えられることもある。以下、そのような例を再度あげてみる。

- (29) (=17) a. 昨日も雨でシタ。 p. 37
 b. Ayer también llovió. p. 32
- (30) (=19) a. しかし司祭は自分の心が一瞬だが洗われた感じだっタ。 p. 137
 b. Pero por un instante sintió el padre como si le hubieran lavado el corazón. p. 109
- (31) (=20) a. 何のために穴を掘るのかと番人に訊ねると、厠をつくるという返事だっタ。
 b. Preguntó a los guardias para qué cavaban aquellas fosas y le dijeron que para hacer letrinas. p. 115
- (32) (=26) a. トモギ村の百姓たちの合図ではありませんでした。トモギ村の信徒なら戸を軽く三つ叩くというのが約束でシタ。 p. 47
 b. No era la contraseña de los labradores de Tomogi. Habían convenido en dar tres

golpes suaves en la puerta. p. 40

「名詞+だっタ」が ser コピュラ文以外の動詞で表出される場合には、いくつかの特徴があるように思われる。まず、当該名詞述語文が(29)のように天候・気候といった自然現象に言及している場合には、スペイン語では必ず当該自然現象を示す動詞を用いた文となる。これはもっぱら自然現象は相当の動詞文で表出されるというスペイン語の語彙(概念)構造に因るものである。次に、(30)(31)(32)のように「名詞+だっタ」の名詞部分が広く(精神・物理)活動・運動を表している場合である。このような名詞述語文は前項でも見たように、スペイン語では対応する動詞の ps.によって表出されることが多い。しかし、以下に示すように、このような活動・運動を示す名詞述語文が ser コピュラ文で表出されることもないわけではない。

- (33) a. 「うんにゃ、パードレ、キチジロは切支丹にてございます」これは少し意外な返事でシタ。p. 49
 b. —Sí, padre, sí lo es.
Era una respuesta un tanto inesperada, ... p. 41

(33)は(31)と同じく「返事だっタ」に対応したものであるが、ここでは imp.によって表出された ser コピュラ文に置き換えられている。問題は一般の動詞によって置換される場合と ser コピュラ文によって置換される場合の違いであるが、今回の調査結果を見る限り取り合えず次のようなことが言えると思われる。まず、当該名詞述語文の示す事態内容にその動作主あるいは対象が明示あるいは含意される場合には、一般の動詞文になる可能性が高いということである。ここでいう動作主・対象の明示とは、例えば(30)の「司祭は」の存在を指す。このような動作主・対象の存在は、問題となる名詞述語文が出来事として把握されていることを強く示唆するものであり、その結果、当該名詞述語文は一般の動詞文で置換されやすくなる。次に、(30)(31)に見られるように、「名詞+だっタ」に何らかの連体修飾文が付加されている場合である。この場合も当該名詞述語文は出来事として解釈されやすく、その結果、対応するスペイン語文は一般の動詞文になりやすい。このような連体修飾文を伴った「名詞+だっタ」が出来事文として解釈されやすいのは、当該連体修飾文が名詞の示す事態の項(argumento)になっていることが多いことに因る。

「名詞+だっタ」が ser コピュラ文によって表出される場合の特徴は、すべて上記の逆となる。すなわち、当該文にはその動作主となるようなものは存在せず、当該文の項と解されるような連体修飾語(文)も付加されていないのである。その結果、当該名詞述語文が ser コピュラ文によって置き換えられる場合、その主語となるのは意味的に当該名詞の示す事態の項と解釈される内容そのものになる。つまり、(33b)を例とするならば、Era una respuesta un tanto inesperada.という ser コピュラ文の主語となるのは、前文の Sí, padre, sí lo es.という具体的な発話内容となるのである。

ところで、今回採取したデータの中には、「名詞+だっタ」の名詞部分が「こと」「もの」といったいわゆる形式名詞の場合もあった。次に、このような「形式名詞+だっタ」がどのようなスペイン語文に対応していたかを見てみる。

- (34) a. それによると新しい将軍イエミツは、彼の祖父や父以上に過酷な弾圧政策を布いているということだッタ。 p. 11
 b. Esos escritos decían cómo el nuevo shogun, Iemitsu, había desarrollado una política de represión más cruel aún que las de su padre y de su abuelo. p. 12
- (35) a. のみならずロドリゴ神父たちに最も打撃を与えたニュースは、この戦争の結果、日本は彼等の国であるポルトガルと全く通商、交易を断絶し、すべてのポルトガル船の渡航を禁止したとのことであッタ。 p. 13
 b. Pero la noticia más desoladora para Rodrigo y sus compañeros fue que el Japón, como consecuencia, había roto sus relaciones comerciales con Portugal y prohibido a las naos portuguesas la entrada en el país. p. 13
- (36) a. 無風の時、暑さは耐えられるものではなかつタ。 p. 12
 b. No soplabla la más leve brisa: el calor era insoportable. p. 13

日本語の形式名詞「こと」に対応するスペイン語文には、(34a)の cómo 以下のように、一般動詞の項、すなわち直接目的語(節)として出現する場合と、(35a)の que 以下のように、ser コピュラ文の補語として出現する場合があった。しかし、いずれの場合も、日本語の形式名詞「こと」がその文字どおりの対応形式であるスペイン語の名詞 cosa には置換されていないこと、そして、またそれはスペイン語の従属文相当のものによって置き換えられていること¹⁹、という二点においては共通している。一方、日本語の形式名詞「もの」は、(36b)のように対応する ser+形容詞句あるいは ser+名詞句に置き換えられていることが多かった。

以上、「タ」によって表出された日本語の名詞述語文に対応するスペイン語の文タイプを見てきたが、それらは次のようにまとめられる。

- (1) 日本語の名詞述語文「名詞+だッタ」は必ずしも対応するスペイン語の ser コピュラ文に置き換えられるわけではない。
- (2) 当該名詞述語文の名詞部分が天候・気候といった自然現象に言及している場合、また、当該名詞部分が広い意味で(精神・物理)活動・運動を表す場合には、ser コピュラ文ではなく、自然現象を表す動詞文また対応する(精神・物理)活動・運動を表す動詞文に置き換えられることが多い。
- (3) 当該名詞述語文の名詞が(精神・物理)活動・運動を表している場合にも、スペイン語の一般的な動詞文に置換される場合と ser コピュラ文に置換される場合とがある。当該名詞述語文が一般のスペイン語動詞文に置換される場合は、日本語名詞述語文に

¹⁹ ただし、次の可能表現の「ことだッタ」の例においては唯一 ser+形容詞句が出現した。

体を動かすたびに手首に食いこむ縄の痛さには馴れたが、彼が辛いのは、自分にむかってわめいている群衆をあの人のように愛することができぬことだッタ。 p. 202

Se había acostumbrado al dolor de la soga comiéndole en las muñecas cada vez que se movía, pero le torturaba otro dolor: él no era capaz de amar como aquel Hombre a aquella multitud que se le encaraba vociferante... p. 161

当該事態の動作主・対象と解釈されるものがその主語（主題）や連体修飾文として明示されていることが多い。一方、当該名詞述語文がスペイン語の *ser* コピュラ文に置換される場合には、そのような動作主・対象は明示されないことが多い。

- (4) 日本語の「名詞+だっタ」の中には名詞部分が「こと」「もの」といった形式名詞のものもある。このうち形式名詞「こと」はスペイン語の従属文相当のものによって置換され、その文字どおりのスペイン語訳である名詞 *cosa* に置き換えられることはなかった。一方、形式名詞「もの」を伴った名詞述語文は対応する *ser*+形容詞句、*ser*+名詞句に置き換えられていた。

さて、上記の結果のうち、日本語の「名詞+だっタ」とそれに対応するスペイン語の形式という観点から特に注目すべきは、(2)(3)だと思われる。なぜなら、これらの結果は、従来運動動詞とは対極にあるとされてきた名詞述語文にも動的な出来事と解釈される可能性があることを強く示唆したものと考えられるからである。

次の第3節では以上のことを踏まえながら、特に、スペイン語の *imp.*と *ps.*によって表出された日本語の名詞述語文に焦点をあて、その違いを考察していく。

3. 考察：日本語の「名詞+だっタ」とスペイン語の *imp.*と *ps.*の *ser* コピュラ文

前節では「名詞+だっタ」によって示される日本語の名詞述語文はスペイン語の複数の時制形式および複数の文タイプによって表出されるのを見た。そのうち本節では、特に、スペイン語の単純時制形式である *imp.*と *ps.*の *ser* コピュラ文に置換された「名詞+だっタ」に焦点をあて、それらを詳細に分析する。そして、日本語の「名詞+だっタ」における時間性表出の特徴ならびにスペイン語の *imp.*と *ps.*の機能的差異を考察してみたい。

3.1. *imp.*の *ser* コピュラ文によって表出された名詞述語文と *ps.*の *ser* コピュラ文によって表出された名詞述語文の解釈

表3によれば、日本語の「名詞+だっタ」は多くの場合、スペイン語の *imp.*に置換えられていた。また同様に、前節では日本語の「名詞+だっタ」はスペイン語の *ser* コピュラ文に置換えられることが多いことも確認された。これらの観察結果は、一見、第1節で見た金水(2001)の日本語名詞述語文に対する見解、すなわち、「名詞+断定の助動詞」からなる名詞述語は静的述語の一つとする見方を正当化しているように見える。なぜならば、スペイン語の規範文法において、*imp.*は、通常、当該事態の開始や終結に言及しない *imperfectivo* な時制形式と見なされてきたし、また、*ser* コピュラ文も開始点や終結点を持たない *estativo* (状态的) な事態と解釈されてきたからである。しかしながら、本稿はこのような日本語名詞述語文に対する見方は一面的に過ぎると考える。というのも、日本語の「名詞+だっタ」の中にはスペイン語の *ps.*、そして、*ser* コピュラ文以外の事態に置換えられたものもあったという事実があるからである。

2.2.1. でも見たように、*ps.*によって表出された「名詞+だっタ」の多くは、*ser* コピュラ文ではない一般動詞文によって置換えられていた。このことは「名詞+だっタ」という名詞述語文の中にも動的な出来事を示すものが存在することを示唆しているが、それで

は同じ「名詞+だっタ」が ps.によって表出された ser コピュラ文に置き換えられた場合はどのように解釈されるのであろうか。

スペイン語の過去に言及する二つの単純時制形式, ps.と imp.の違いを時間的限定性の有無に基づくアスペクト対立にあるとする説に従うならば, ps.によって表出された ser コピュラ文は当該事態の内容が発話時において無効であることを示すということになろう。この解釈は(37)(38)の「名詞+だっタ」およびそれに対応したスペイン語コピュラ文には正しく適用される。(37)では当該事態の時間的限定性を明示する「私やガルベには慣れるまで」(hasta que nosotros nos hicimos a ellos)という副詞句が共起しており, また, (38)の日本語文「元当地の耶蘇会の長であっタ」では, 「元」という語の存在から語り手の発話時点において当該人物が耶蘇会の長ではないことが明かだからである。以上のことは, 時間的限定性を明示する副詞句や語と共起し ps.によって表出された ser コピュラ文に置き換えられた日本語の「名詞+だっタ」は, それ自体時間的限定性を持つ事態と見なされることを示唆するものである。

- (37)(=11) a. 彼らにとってはこれは休息となりますが, 私やガルベには慣れるまで甚だこの習慣は苦痛でしタ。 p. 60
 b. Para estos japoneses es la postura de descanso; pero hasta que nosotros nos hicimos a ello, fue muy doloroso. p. 50
- (38)(=16) a. 今は二人のみ生存しているが, 一人は忠庵というポルトガル人で元当地の耶蘇会の長であっタが, ... p. 230
 b. Actualmente sólo hay dos vivos dos apóstatas: uno es el portugués Chuan, que fue provincial de los jesuitas del Japón,... p. 186

しかしながら, スペイン語の ps.によって表出された ser コピュラ文およびそれに対応する日本語の「名詞+だっタ」のすべてが (37ab)(38ab)と同じ解釈を受けるわけではない。以下の例を参照されたい。

- (39)(=13) a. これがキチジロに話しかけた私の最初の言葉でしタ。 p. 92
 b. Éstas fueron mis primeras palabras a Kichijiro, y ... p. 75
- (40)(=15) a. 両側に並んでいる顔の中から司祭はひそかに切支丹らしい者の表情をさがしたが無駄だっタ。 p. 201
 b. El padre trató de encontrar en aquella doble hilera de caras el gesto revelador de un cristiano oculto, pero fue inútil. p. 160

(39ab)の示している「これがキチジロに話しかけた私の最初の言葉でしタ」という内容, 特に, 主語(主題)である「これ」とその補語(述部)である「私の最初の言葉」の関係は, 前述した(37)(38)のように語り手の発話時点において無効になっているとは考えにくい。「これ」によって指示された内容が「私の最初の言葉」であるという属性は不変だが

らである。(40ab)にも同様のことが言える。同文の「無駄だった」*fue inútil*は、司祭の行なった行為が結局そのような評価を受けたことを示しているが、この時の司祭の行為に対する評価自体は後に変化することはないと解釈されるからである²⁰。

さて、山村(2003)によれば、(39b)(40b)に出現した *ps.*によって表出された *ser* コピュラ文は、当該事態、すなわち、主語と補語の間に *ser* の意味する等号関係が成立したことを表出すると解釈されている。この解釈は、先に見たアスペクトに基づく説とは異なり、当該事態の時間的限定性の有無とは何ら関係がないので、アスペクト説が処理できない例もうまく説明することができる²¹。今、この解釈を日本語の名詞述語文に應用するならば、(39a)(40a)の「名詞+だった」は主題の指示内容と当該名詞の示す内容の間に等号関係が成立したことを表しているということになる。ここで注目すべきは、等号関係の「成立」という部分であろう。なぜなら、異なる二つのもの間に等号関係を認めるというのは発話者の一種の評価であり、その成立というの、換言すれば、発話者の評価という行為・出来事の成立ということになるからである。つまり、スペイン語の *ps.*によって表出された *ser* コピュラ文およびそれに対応する日本語の「名詞+だった」は、発話者の評価という出来事を表出していると考えられるのである。このことは、出来事の表出という意味において、*ps.*によって表出された *ser* コピュラ文と *ps.*によって表出された一般動詞文の間には何の違もないということを示すものである。

次に、「名詞+だった」の大部分が対応していた *imp.*によって表出された *ser* コピュラ文の意味するところを見てみよう。結論を先にいえば、上で見た *ps.*によって表出された *ser* コピュラ文が主語と補語の間の等号関係の「成立」自体を表出しているのに対し、*imp.*によって表出された *ser* コピュラ文は主語と補語の間に等号関係が「存在」していることを表出していると言える。以下の例を参照されたい。

- (39) (=13) a. これがキチジロに話しかけた私の最初の言葉でした。 p. 92
 b. *Éstas fueron* (*ps.*) *mis primeras palabras a Kichijiro, y ...* p. 75
- (41) a. これは彼が日本人として初めてやる討論だった。 p. 114
 b. *Ésta era* (*imp.*) *la primera polémica que tenía con un japonés.* p. 92

(39b)(41b)は補語に同じ序数詞 *primera* が出現しているが、前者は *ser* の *ps.*によって表出され、後者は *ser* の *imp.*によって表出されている。この違いはどのように説明されるのだろうか。山村(2003)によれば、それは主語と補語の間の等号関係の「成立」を示しているのか、それとも、ある過去の時点における当該等号関係の「存在」を示しているのかに

²⁰ (39/40)で実際に終結したと解釈されるのは、「私がキチジロに話しかけた」という行為、「司祭が切支丹らしい者を探した」という行為である。この行為とそれに対する評価、つまり、「キチジロに話しかけた」という行為とそれが「私にとって初めてのこと」だという評価が、時間的限定性の有無に関して互いに異なっているという点は重要である。

²¹ 山村(2003)の解釈はアスペクト説にとって都合のよい(37)(38)の例もうまく説明することができる。主語と補語の間に等号関係が成立したということとその等号関係が後に解消されたということは直接矛盾するものではないからである。

拠るといふことになる。このうち等号関係の「成立」については上で見たので、ここではその「存在」の意味するところを簡単に見ておこう。

山村(2003)は、スペイン語の ps. と imp. の違いは基準時とそれに対する時間関係にあるとする時間関係説の立場を取っている。したがって、それによれば、スペイン語の imp. は「既定の過去時に対して同時的關係にある事態を示す」と解釈されることになる。このとき重要なのは、山村(2003)にとっての「同時的關係」とは当該事態の pr. による表出と等価だということである。以上のことを(41b)の imp. によって表出された ser コピュラ文を用いて説明すると次のようになる。

- (41) a. これは彼が日本人として初めてやる討論だっ**た**。 p. 114
 b. Ésta era (imp.) la primera polémica que tenía con un japonés. p. 92
 imp.: PoV
 P (=既定の過去時, 小説の当該場面) oV
 = P (=既定の過去時, 小説の当該場面) (ésta es la primera polémica que...)

上記の PoV という記号は imp. の機能を表すために山村(1996)で提案されたもので、P は imp. の基準時である「既定の過去時」を示し、oV は imp. がその既定の過去時に対して示す「同時的」時間関係を示している。今、上で提起された imp. によって表出された ser コピュラ文の解釈をこの記号を用いながら(41b)に対して適用するならば、次のようになる。まず、imp. の表出に不可欠な P は、当該文が出現した文脈の示す過去の時点と想定される。そして、当該文はその時点に対して同時的關係にある事態、すなわち、pr. によって表出された ser コピュラ文の事態 *ésta es la primera polémica que...* を表出しているのである。先に述べた主語と補語の等号関係の「存在」とは、この ser コピュラ文の pr. による表出が示す内容を指す。このように考えるならば、通常、imp. や pr. によって表出された ser コピュラ文が示すと言われる主語の属性というのは、実は既定の過去時や発話時におけるこの主語と補語の等号関係の「存在」のことに他ならないということになる。

さて、上記の imp. によって表出された ser コピュラ文に対する説明はそのままこの形式に対応した日本語の「名詞+だ**っ**た」にも適応される。そうすると、当該スペイン語形式によって置換された日本語の「名詞+だ**っ**た」は、既定の過去時、すなわち、既定の小説場面において、主題の指示内容と当該名詞の内容との間に等号関係が「存在」していることを表出しているということになる。

以上、特に、日本語の「名詞+だ**っ**た」に対応する ps. によって表出された ser コピュラ文ならびに imp. によって表出された ser コピュラ文に焦点をあてその意味するところを考察した。その結果は次のようにまとめられる。

- ・ ps. によって表出された ser コピュラ文に対応する日本語の「名詞+だ**っ**た」は、主題の指示内容と当該名詞の示す内容との間に等号関係が「成立」(=「生起」)したことを意味する。これは、換言すれば、主題と当該名詞の指示内容との間に等号関係が成り立つという評価を発話者が下したことを意味するものである。
- ・ imp. によって表出された ser コピュラ文に対応する日本語の「名詞+だ**っ**た」は、既定

の過去時（「語り」の世界では、既定の場面）において、主題の指示内容と当該名詞の示す内容との間に等号関係が「存在」することを意味する。これは、換言すれば、その場において当該名詞の示す内容が主題の属性であることを示したものと言える。

3.2. 「名詞+だっタ」と工藤（2001）

3.1. では imp. によって表出された ser コピュラ文に対応する「名詞+だっタ」と ps. によって表出された ser コピュラ文に対応する「名詞+だッタ」を考察することにより、日本語の「名詞+だっタ」には二つの異なる解釈、すなわち、当該事態の「成立」という解釈と既定の過去時（場面）における当該事態の「存在」という解釈が可能であることを見た。このことは、これまで時間性の欠如した静的述語の一つと考えられてきた日本語の名詞述語文に対して、新たな観点からの考察が可能であることを示唆したものと言える。実際、最近の日本語研究者の中には、名詞述語文にも時間的観点が必要とするものも出てきている。そこで本項では、その代表ともいえる工藤（2001）を取り上げその解釈を本稿の立場から検討してみたい。

工藤（2001）は動詞とそれ以外の述語文の別なく、「述語の意味的タイプ化において、動的現象の時間的展開の捉え方の違いに関わるアスペクトとも、基本的に発話時を基準軸とする時間的位置づけに関わるテンスとも異なる意味論的カテゴリーとして、〈時間的限定性〉を取り出ししておくことが重要であることが分かる。」とし、日本語の述語は「時間的限定性のある動詞述語と、時間的限定性のない名詞述語とを両極として、形容詞述語はその中間に位置づき、動詞寄りの〈状態形容詞〉と名詞寄りの〈特性形容詞〉に分かれる。」と述べている。さらに重要なのは、「この時間的限定性の違いが、過去形の意味用法の違いと相関しているのである。」と述べている点で、その結果、「動詞という時間抜きには成り立たない現象を捉える述語のタイプでは〈過去〉か〈非過去〉かの相互排除的なテンス対立が最もはっきり出てくるが、〈質（実体的属性）〉という時間に無関心な、従って〈知覚〉による認識ではなく〈思考〉による一般化がある述語のタイプでは、話し手による確認の仕方というムードの意味にならざるをえない。」と述べている点である。工藤の考え方をその具体例と共に見てみよう²²。

- 〈運動〉 花子が歩く。（出発だ。完成だ。）²³
- 〈状態〉 足が筋肉痛だ。
- 〈存在〉 先生は留守だ。
- 〈特性〉 彼は優秀だ／優等生だ。
- 〈関係〉 趣味が共通だ。
- 〈質〉 ポチは秋田犬だ。

工藤によれば、述語は時間的限定性の有無により上記のように分類することができるという。この分類によれば、主に動詞述語によって示される〈運動〉類に属す述語が時間的

²² 以下の例は、工藤（2001：42）にある図1から本稿に関係する名詞述語文を取り出したものである。

²³ 「出発だ」「完成だ」は工藤（2001：43）の表1の名詞述語に出ていたものを引用した。

限定性が最も高く、その後、静態動詞や形容詞によって示される〈状態〉類、〈存在〉類と続き、名詞述語によって示される〈質（実体的属性）〉が時間的限定性が最も低い、すなわち、最も時間的永続性があると解釈されている。

工藤が述語の分類に上記の時間的限定性の有無という基準を設けたのは、それが過去形の意味と相関しているように見えるからである。以下を参照されたい²⁴。

- (42) a. あの本なら中学の時に読んだ。〈単純過去〉
 b. この本ならもう読んだ。〈現在完了〉
- (43) a. 今朝から頭が痛かった。〈過去から現在までの持続〉
 b. そうだ、子供が病気だった。今日は早く帰ってやらなくちゃ。〈想起〉
 c. あら、頭が痛かったんですか。早く言ってくれば薬を買って来たのに。〈発見〉
- (44) a. 父は甘党でシタ。〈主体の非現存（死亡）〉
 b. そうそう、君は甘党だったね。〈想起〉
 c. おや、君は、甘党だったのか。〈発見〉

工藤によれば、時間的限定性の高い動詞述語の「タ」は(42ab)が示すように、現在と切り離された過去（単純過去）あるいは現在と関係づけられた過去（現在完了）を示すが、時間的限定性の低い述語はそれとは異なる意味を示すという。例えば、(43)の「病気だ」「痛い」は、工藤によれば〈状態〉に属するのだが、これらの述語の「タ」は動詞述語のような単純過去の用法の他に、(43a)のような過去から現在までの持続を表す現在完了の意味、さらに、「現在の状態に対する発話者の想起・発見といったムード的意味」を表すという。そして、さらに時間的限定性が低く一時的現象とは見なされにくい〈特性〉の類に属す「甘党だ」の「タ」は、(44abc)が示すように、もっぱら「〈主体の非存在（消滅）〉か、〈想起・発見〉というムード的意味を表すことになる。」という。ここでいう「タ」のムード的意味とは、一般に、発話時において真であることが明らかな状態に対して用いられた「タ」の用法のことを言う。

さて、以上の工藤の考察と本稿で明らかになった事項とを比較検討してみると以下のことが分かる。

まず、工藤が依拠した時間的限定性の有無というのは主に当該事態の終結点に着目したものだという点である。このような述語の終結点の有無に注目する見方は、一見スペイン語の ps. と imp. に対するアスペクト的解釈と相通ずるものがあるように見えるが、両者は同じものではない。例えば、工藤の分類によれば時間的限定性の低い〈関係〉に分類されている「友人だ」という名詞述語文は、以下に見られるように、スペイン語では時間的限定性の表示に言及しない imp. のみならず時間的限定性を表示するという ps. による表出も可能だからである²⁵。

²⁴ 工藤 (2001: 45) に出ている例からの引用。本稿の趣旨に合わせて名詞述語の「タ」はカタカナ表記に改めている。

²⁵ 以下は山村の作例である。

- (45) a. José era (imp.)/fue (ps.) su amigo.
ホセは彼の友人だった
- b. Desde entonces José fue (ps.) su amigo.
その時以来、ホセは彼の友人だった。

上記の *ser amigo* 「友人だ」の ps.による表出でとりわけ興味深いのは、それが (45b) のように、当該事態の成立も示すことができるという点である。これは、前項ですでに指摘されたことであるが、ここでもう一度確認しておきたい。(45b) は主語である José と補語の示す *su amigo* 「彼の友人」との間に副詞句の示す時点 *desde entonces* 「そのとき以来」より等号関係が成立したことを意味している。一方、この (45b) に添えられた日本語の「その時以来、ホセは彼の友人だった」も意味的にはこの ps.によって表出されたスペイン語文と同じものを示している。したがって、以上の解釈によれば、日本語の名詞述語文の「タ」には工藤が指摘する「主体の非存在」「想起」「発見」の他に、当該事態の「成立」(＝生起) といった動的意味合いも存在するということになる。工藤 (2001) にはこの「名詞+だった」の示す「成立」用法の記述がまったく見られないが²⁶、それは上でも述べたように、彼女の提案する時間限定性という概念がただ当該事態の終結点の有無に基づくものだからだと思われる。

以上、本稿で明らかになったことを踏まえ、工藤 (2001) の主張を検討した。確かに、同論文が日本語のテンス・アスペクトの研究に述語そのものが示す時間限定性という新たなカテゴリーを導入し、これまで品詞別に議論されてきた「タ」の機能に対して統一的視点を与えた点は高く評価されるものであろう。この時間限定性の導入により、いわゆる名詞述語の中にも動詞述語と同じように終結点を持ち、その結果、動詞述語と同じような過去形の解釈を受けるものが存在することが明らかになったからである。しかしながら、本稿が対象とした「名詞+だった」の分析に限って言えば、工藤の解釈は従来の枠組を超えたものではなかったと言える²⁷。

4. まとめ

以上、日本語の名詞述語文の「タ」による表出、すなわち、「名詞+だった」とそれに対応するスペイン語の形式を観察および考察してきた。その結果は、以下のようにまとめられる。

観察：

I 「名詞+だった」に対応するスペイン語の時制形式

(1) 日本語の「語り」の地の文に出現した名詞述語文「名詞+だった」は、頻度順にス

²⁶ 名称の上では本稿の言う「タ」の「成立」用法と工藤の「発見」用法は似たものように見える。しかし、少なくとも工藤の引く「発見」用法の例がスペイン語の imp. に対応することもあるということを考えるならば、両者は完全には一致しないと考えておきたい。

²⁷ とはいえ、これまで注目されなかった「出発だ」「完成だ」といった「出来事名詞+だ」を動詞述語と同じく「運動」類に分類したことは大いに評価されるべきである。cf. 工藤 (2001), p.43表1。

- ペイン語の imp., ps., pr, cond, plusc, pc.に置き換えられていた。
- (2) スペイン語の imp.によって表出されていた「名詞+だッタ」は、当該場面における主題（主語）の属性・状況表現を示していることが多かった。
 - (3) スペイン語の ps.によって表出されていた「名詞+だッタ」は、動的な出来事に言及していることが多かった。
 - (4) スペイン語の pr.によって表出されていた「名詞+だッタ」は、いわゆる「真理」あるいは「歴史的現在」に言及していた。
 - (5) スペイン語の cond.によって表出されていた「名詞+だッタ」は当該場面における推量を示していた。
 - (6) 日本語の「名詞+だッタ」がスペイン語の plusc.によって表出されると、当該事態はすでに提示された別の事態よりも前に生起したと解釈されることになる。
 - (7) スペイン語の pc.によって表出された「名詞+だッタ」は、いわゆる「歴史的現在」の用法と解釈されるものだった。

II 「名詞+だッタ」に対応するスペイン語の文タイプ

- (1) 日本語の名詞述語文「名詞+だッタ」は必ずしも対応するスペイン語の ser コピュラ文に置き換えられるわけではない。
- (2) 当該名詞述語文の名詞部分が天候・気候といった自然現象に言及している場合、また、当該名詞部分が広い意味で（精神・物理）活動・運動を表す場合には、ser コピュラ文ではなく、自然現象を表す動詞文また対応する（精神・物理）活動・運動を表す動詞文に置き換えられることが多い。
- (3) 当該名詞述語文の名詞が（精神・物理）活動・運動を表している場合にも、スペイン語の一般的な動詞文に置換される場合と ser コピュラ文に置換される場合とがある。当該名詞述語文が一般のスペイン語動詞文に置換される場合は、日本語名詞述語文に当該事態の動作主・対象と解釈されるものがその主語（主題）や連体修飾文として明示されていることが多い。一方、当該名詞述語文がスペイン語の ser コピュラ文に置換される場合には、そのような動作主・対象は明示されていないことが多い。
- (4) 日本語の「名詞+だッタ」の中には名詞部分が「こと」「もの」といった形式名詞のものもある。このうち形式名詞「こと」はスペイン語の従属文相当のものによって置換され、その文字どおりのスペイン語訳である名詞 cosa に置き換えられることはなかった。一方、形式名詞「もの」を伴った名詞述語文は対応する ser+形容詞句、ser+名詞句に置き換えられていた。

考察：

ps.によって表出された ser コピュラ文に置換された「名詞+だッタ」と imp.によって表出された ser コピュラ文に置換された「名詞+だッタ」

- ・ ps.によって表出された ser コピュラ文に置換された「名詞+だッタ」は主題の指示内容と当該名詞の示す内容の間に等号関係が「成立」したことを表す。これは、換言すれば、主題と当該名詞の指示内容との間に等号関係が成り立つという評価を発話者が下したことを意味するものであり、このことから日本語の「名詞+だッタ」にも動的述語と同じ

出来事性が認められる場合があると考えられる。

- ・ imp.によって表出された ser コピュラ文に対応する日本語の「名詞+だっタ」は、既定の過去時（「語り」の世界では、既定の場面）において、主題の指示内容と当該名詞の示す内容との間に等号関係が「存在」していることを表す。つまり、これはその場面において、当該名詞の示す内容が主題の属性であることを示すものである。

参考文献

- Brucart, J. M. (en prensa): “El valor del imperfecto de indicativo en español”.
- Cartagena, N. (1999): “Los tiempos compuestos.”, *Gramática descriptiva de la lengua española*, editado por Bosque, I & Demonte, V., pp. 2935-2975, Madrid: Espasa Calpe.
- García Fernández, L. (1998): *El aspecto gramatical en la conjugación*, Madrid: Arco/Libros, S.L.
- (1999): “Los complementos adverbiales temporales. La subordinación temporal”, *Gramática descriptiva de la lengua española*, editado por Bosque, I. & Demonte, V., pp. 3129-3208, Madrid: Espasa Calpe.
- 金水 敏 (2001): 「時の表現」『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』金水敏, 工藤真由美, 沼田善子著, pp. 3-94, 東京: 岩波書店.
- 工藤真由美 (1995): 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京: ひつじ書房.
- (2001): 「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『言語』 Vol. 30, No. 13, pp. 40-47. 東京: 大修館書店.
- 松村瑞子 (2003): 「日本語の談話における発話・思考の引用—英語との対照を中心に—」言語文化叢書『テンスとアスペクト—日・英・仏・西語の観点から—』(九州大学大学院言語文化研究院発行), pp. 71-82.
- Real Academia Española (=RAE) (1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Calpe.
- Rojo, G. (1974): “La temporalidad verbal en español”, *Verba* 1, pp. 68-149, Universidad de Santiago de Compostela.
- (1990): “Relaciones entre temporalidad y aspecto en español”, *Tiempo y aspecto*, editado por Bosque, I, pp. 17-41, Madrid: Cátedra.
- Rojo, G & Veiga, A (1999): “El tiempo verbal. Los tiempos simples.”, *Gramática descriptiva de la lengua española*, editado por Bosque, I & Demonte, V., pp. 2867-2934, Madrid: Espasa Calpe.
- 山田善郎他 (1995): 『中級スペイン文法』, 東京: 白水社.
- 山村ひろみ (1996): 「canté/cantaba のアスペクト対立に基づく解釈をめぐる」*HISPANICA* 40 (日本イスパニヤ学会発行), pp. 48-62.
- (1997): 「canté 形, cantaba 形と時間限定性」*HISPANICA* 41 (日本イスパニヤ学会発行), pp. 53-66.
- (1998): 「pretérito による表出のための条件—無生主語文の場合—」『言語文化論究』 No. 9 (九州大学言語文化部発行), pp. 185-207.
- (1999): 「スペイン語の imperfecto と時間限定性」『言語文化論究』 No. 10 (九州大

- 学言語文化部発行), pp. 11-32.
- (2000) : “Unas dudas sobre la interpretación basada en la oposición aspectual del pretérito simple y el pretérito imperfecto”『言語文化論究』No. 12 (九州大学大学院言語文化研究院発行), pp. 145-154.
- (2001) : “La función básica del pretérito imperfecto y la delimitación temporal”, *Estudios Hispánicos* 21 (Asociación Coreana de Hispanistas 韓国イスパニヤ学会発行), pp. 311-317.
- (2003) : 「スペイン語 ser コピュラ文の pretérito perfecto simple による表出と pretérito imperfecto による表出」言語文化叢書『テンスとアスペクトー日・英・仏・西語の観点からー』(九州大学大学院言語文化研究院発行), pp. 1-46.